

モンゴル帝国の出現

1) モンゴル帝国の起源

モンゴル高原は、ウイグル滅亡(840)以来、トルコ系・モンゴル系の遊牧諸部族が約350年にわたり割拠抗争し、10世紀初め以降、諸部族の多くは契丹(遼、キタイ)に服属したが、契丹は1125年、金に滅ぼされた。大興安嶺 シンアンリン 方面にいたモンゴル部(～部とはその地域で生活する部族のこと)は、12世紀後半にはモンゴル高原中心部に進出した。

モンゴル部は、12世紀末、**テムジン** 1162?-1227 が指導者となると急速に台頭した。モンゴル諸部族を統一したテムジンは、1206年諸部族長を集めた【1: 】において、君主(ハンあるいはカン)に推戴され、【2: 】(成吉思汗)位1206-27と名乗り、国号を「大モンゴル国」と称した。これが【3: 】の起源である。

[今日のモンゴル高原] ソ連に次ぐ人類史上2番目の社会主義国(1924年)であったモンゴル人民共和国は、1992年、社会主義を放棄、国名もモンゴル国となり、急激な資本主義化で貧富の格差が拡大している。社会主義時代、「帝国主義的である」として教育が禁じられていたチンギス=ハンについては、国家創成の英雄として復権に力を入れ、紙幣にも使用している。その英雄視は、やや力が入りすぎの観もあるが、社会主義時代に全く省みられなかったチンギス=ハン時代の遺跡の発掘や保存にも力を入れている。

2) チンギス=ハンの偉業

チンギス=ハンは、**千戸制を創設**した。これは服属した全騎馬遊牧部族を千戸単位に95の千人隊(千戸集団)に再編成、功臣に率いさせた。95というのは創設時で、当然その後増設された。従来の部族連合国家ではなく、**チンギス=ハンとその子孫に権力を集中**させた。モンゴル高原は彼自身、東方は弟たち、西方は息子たちが固め、引き継いだ。

モンゴル帝国軍の強さの秘密は①軽装備の騎兵だけの軍隊(1日で70km移動。歩兵は30kmが限度)。②小柄でタフなモンゴル馬を軍馬に採用。③強力な弓を多用、白兵戦による兵員の損耗を防ぐ。④厳格な規律。⑤ムスリム商人の協力。⑥実力主義。後掲3)のように遠征を行い、交易路と農耕地域の確保に努めた。

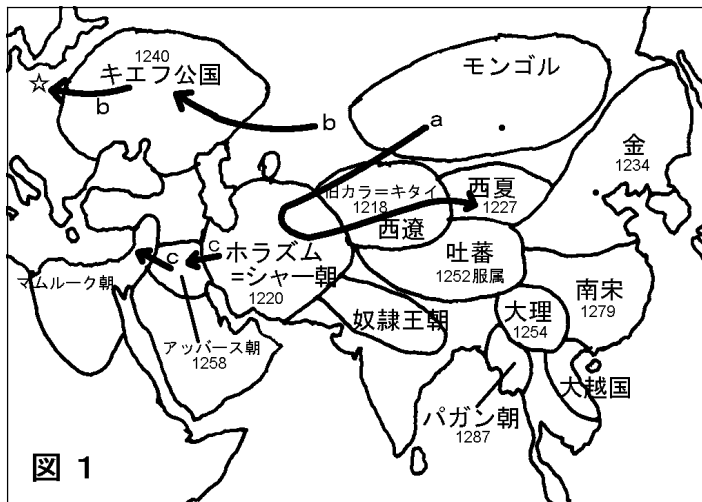


図 1

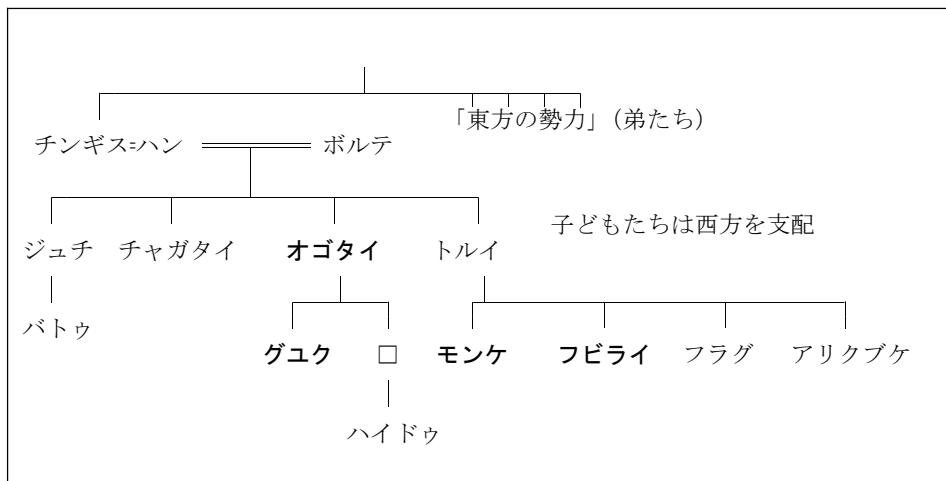
3) チンギス=ハンの遠征

- ①金を攻撃した(1215年)が滅ぼせず(1234年、金を滅ぼしたのはオゴタイ)、図1の矢印aのように【4: 】した。
- ②ナイマン部が王位を奪った西遼(カラ=キタイ)を滅ぼした(1218年)。
- ③【5: 】を征服(1220年)。
- ④【6: 】を滅ぼした(1227年)。

この他、西北インドやロシア南部にも侵入している。内陸アジアの騎馬遊牧民のほとんどがチンギス=ハンのもとに結集した。この国の支配層に加わる者は、出身にかかわらず、「モンゴル」とされ、「モンゴル人」意識を共有した。

1227年、チンギス=ハンは波瀾万丈の生涯を閉じた。生前、第3子のオゴタイを後継者に指名していた。オゴタイは近年オゴデイとも書くが発音表記が異なるだけである。同様にフビライはクビライとも書く。

- 4) チンギス=ハンと妻ボルテの間に、第1子=ジョチ、第2子=チャガタイ、第3子=オゴタイ、第4子=トルイが生まれた。4人とも有能で父と協働して外征し、よく父の期待に応えた。ジョチとチャガタイは不和。穏和なオゴタイは兄のいずれとも仲が良い。モンゴル高原の末子相続の慣習によれば後継者は人望厚いトルイだがトルイは固辞。1229年、クリルタイで第3子のオゴタイが第2代モンゴル皇帝に即位することに決した。(チンギス=ハン没の2年後)



父チンギス=ハン、長男ジュチ(ジョチ)には他部族に略奪された後奪還された母から生まれたという共通点があり、父は自らの武勇で『蒼き狼』の末裔であることを証した。ジュチとチャガタイの不和は「ジュチが実子でない」疑惑が発端とされ、歴史小説の格好の題材となっている。チンギス=ハンはジュチを実子と認めている。なお、略奪された妻を奪還するストーリーは騎馬遊牧民の英雄譚によくある。
→ 井上靖『蒼き狼』、陳舜臣『チンギス=ハンの一族』

上の略系図において、即位順に番号を付し、ハーンを○で囲め。ハーンは大ハーン、大ハーンと同じ。後掲5) 参照。

- 5) ハンはkhan とアルファベット表記されるがkhaの発音は日本語にはなく「ハ」でも「カ」でもない。ハンとカン日本語

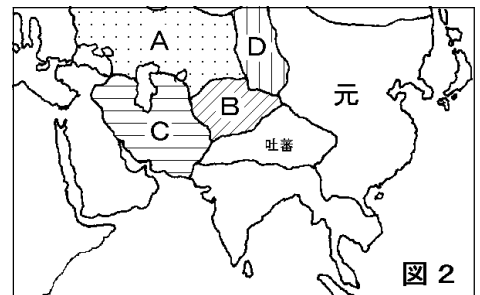
表記の違いに過ぎない。本書は代表的な教科書に従い「ハーン」で統一。巨大なモンゴル帝国では、ユーラシア東方（13世紀以降中国も含む）を支配する皇帝がモンゴル帝国全体の支配者である。その全体の支配者を「ハーン」(khaan)と初めて自称したのがチンギス=ハーンの第3子、第2代の**オゴタイ**なのだ。日本の学会で「ハーン」もしくはモンゴル皇帝の意味で「大ハーン」ないしは「大ハーン」と記すことがあるのは、初学者には混乱をもたらすものでしかない。代表的な教科書は「大ハーン」と記す。初代のハーンはオゴタイ（もちろんチンギス=ハーンから数えて実質2代目）。その継承者（実質3代目）はオゴタイの子、グユクであるが、グユクはハーンの称号は父オゴタイの一身専属の称号であるとみなし、これを継承せず単にハーンと自称した。この称号の起源は、5世紀中ごろモンゴル高原、タリム盆地を支配した**柔然**（6世紀中ごろ突厥に滅ぼされる）の君主社崙が丘豆伐可汗 きゅうとうはつかガハと称したのが初期の例。これは単りに替わって騎馬遊牧民国家の王の称号となり、のちにカガハ khaghan の gha が前の音に吸収されてカ（ハ）ン khan となった。

モンゴル帝国の成立 ユーラシア大陸の半分近くを支配する史上最大の大帝国内に成長（13世紀中ごろ）するまで。

- 1) 第2代皇帝、チンギス=ハーンの第3子、【7: 】, 位1229-41の業績。
 - ①1234年、親征して金を滅ぼし、既に華北を領有した。1279年、南宋を滅ぼし、中国を統一するのはフビライ。
 - ②1235年、モンゴル高原に首都【8: 】, を建設し（ウランバートルに比較的近い）、駅伝制を整えた。
 - ③モンゴル帝国全体の支配者という意味でハーンの称号を初めて使用した。漢字は可汗。
- 2) 図1の矢印bは、チンギス=ハーン第1子のジュチの子、【9: 】, 1207-55の西征の進路である。バトゥは叔父のオゴタイの命を受け、1236年に始まるロシア遠征でキプチャク草原を制し、1240年、キエフ公国を滅ぼした。リーグニッツの戦い（=旧称ワールシュタットの戦い、1241年 図1の☆印）でも質量とも圧倒的な軍事力で、ポーランド・ドイツ諸侯連合軍を撃破した。モンゴル軍の総指揮はハンガリーに駐留していたバトゥではなく、チャガタイの六男バイダル（ポーランド側史料では「ペタ」）であったと推定される。ヨーロッパの重装騎兵軍団は、モンゴルの軽装騎兵軍団の集団戦法の前に大敗した。リーグニッツ砦でモンゴル軍を迎え撃った**シュレジエン公ハイネリヒ2世**※も戦死した。ポーランドを席捲したモンゴル軍は一時オーストリアのウィーン近くまで迫るが、オゴタイの急死（1241）で撤退し、その後、モンゴル勢力はヨーロッパに侵攻することはなかった。西征の帰路、**サライ**を都として【10: 】, 1243-1502を建国、代々のジュチ家が支配。なお、この戦いをドイツでは「リーグニッツの戦い」という。「ワールシュタット」は「死体の地」という意味である。 ※ この名が出題されたことがある。首級があげられている絵が残っている。これより**1480年までの約250年間、ロシアはキプチャク=ハン国の支配下にあった**。諸公は貢税と軍事的奉仕を義務づけられたハンの家臣となり、人民は徴税と徴兵の対象となった。その支配の過酷さゆえに、ロシア人はこれを「タタールの軛（くびき）」と呼んだ。支配の過酷さについては異説がある。
- 3) オゴタイの病死（1241）で、その子、グユクが即位したが、ハーン（大ハーン）とは自称しなかった。1246年に即位したが、48年に中央アジアで没している。バトゥによる暗殺の可能性が高い。即位式のクリルタイにはローマ教皇の使者プラノ=カルピニ 1182-1252 も列席した。No.78参照。
- 4) グユクの後継者は、チンギス=ハーン第4子トルイの子、【11: 】, 位1251-59で、モンケはハーンを称した。南宋を攻めたが滅ぼすには至らなかった。ルブルック 1220?-1293? もカラコルムでモンケに謁見している。No.78参照。
- 5) モンケの弟、【12: 】, は、モンケの命により雲南の大理国を滅ぼし、チベットを征服、ヴェトナムに侵攻。南宋にも遠征した。図1の矢印cは、モンケの弟、【13: 】, （フレグ）1218-65が、モンケ=ハーンの命により西征した時の進路。フラグは1258年、【14: 】, を滅亡させた。
- 6) **モンケの急死（1259）**で、カラコルムにいた末弟アリクブケ?-1266が後継者になろうとした。これに対して**次弟のフビライ** 位1260-94が帝位継承戦争を起こし、東方勢力の支持を受けたフビライが勝利した。フビライは1260年即位。ハーン（大ハーン）を称した。フビライは1264年に、草原地帯、農耕地帯とともに監視できる位置に、【15: 】, （現在の北京）を築き首都とした。1271年、国号を大元としたことから、ユーラシア東方を支配するフビライの帝国を【16: 】, （元朝）という。1279年、【17: 】, を滅ぼし、中国を再統一した。
- 7) 「オゴタイ=ハン国」第4代とされるハイドゥ（カイドゥ、オゴタイの孫）は、13世紀後半30年以上にわたってフビライがモンゴル帝国全体のハーンであることを認めず、チャガタイ=ハン国、キプチャク=ハン国と同盟してフビライに反抗し（元朝の味方はイル=ハン国だけ）、モンゴル帝国には大きな亀裂が生じた。この他にもしばしば紛争が生じたが、**広域に渡る交通が妨げられることはなく**、14世紀には、東西交流はますますさかんになった。巨大な帝国を作ることができた背景には、オアシス都市の住民や【18: 】, たちが、【19: 】, の安全性を確保できる政治勢力を必要としていたことがある（かつて、唐がその役割を担っていた）。

13世紀半ばに、史上空前の大帝国、モンゴル帝国が出現した！

フビライの帝国を**大元ウルス（元朝）**という。ウルスとは、人間集団とそれによって構成される領域を指す。ウルスは「**国**」と訳される現代モンゴル語となっているが、遊牧社会では人間の集合体の形成がすなわち国家形成であったことがわかる。モンゴル帝国は、大元ウルスを中心とするチンギス家一族の各ウルスの集合体である。以下のA B C Dの位置は図2参照。



- A : 【20: 】, の【21: 】, （ロシア）1243年建国
首都は**サライ**。最も早く13世紀後半にイスラーム化した。
- B : チャガタイ家の【22: 】, （中央アジア）1227年建国
首都は**アルマリク**。14世紀にイスラーム化した。
14世紀中ごろ東西に分裂、西チャガタイ=ハン国から【23: 】, 1336-1405 が台頭し、ティムール朝を創設（1370）した。
- C : 【24: 】, の【25: 】, （イラン）
首都は**タブリーズ** 1258年建国
ここでも、第7代ガザン=ハン 位1295-1304の時代からモンゴル人が**イスラーム教**に改宗した。
- D : 「オゴタイ=ハン国」（西北モンゴル、厳密にはオゴタイはハーン）は、チャガタイ=ハン国に併合されたとする記録もあるが、この国自体が存在しなかったというのが現在では通説となっている。図2は旧説による。
A B Cを、ジュチ=ウルス、チャガタイ=ウルス、フラグ=ウルスと表現することもある。成立した順はB→A→C